

The Young Lizards (ザ・ヤング・リザーズ) は、その身近かつ複雑な、調和したビートに乗った演奏で世界を乗っ取りにかかるシアトルのジャズ共同体スーパーグループ。Jaco Pastorius (ジャコ・パストリアス) の *Three Views of a Secret* や、John Coltrane (ジョン・コルトレーン)、Joe Henderson (ジョー・ヘンダーソン)、Woody Shaw (ウディ・ショウ) の作曲集、独自のオリジナル曲など、豊かなモダンの音調への探求に挑戦、従来のジャズ・オルガン・カルテットを变身させた。シアトルに拠点を置くサクソフォン奏者・Chris Fagan (クリス・ファガン) の独創産物であるこの**The Young Lizards** は、最前線に Hammond B3 オルガンとドラムを持ち込み、サクソフォンとギターのソロを乗せて猛烈かつオーケストラ的な音の波を送り出す。



サクソフォン奏者・Chris Fagan (クリス・ファガン) のジャズ指導歴はカルフォルニア州クレアモントのポモナ大学から始まる。共同指導者 Bobby Bradford (ボビー・ブラッドフォード) をはじめ、当時のチームメンバーには Carl Burnett (カール・バーネット)、Bob Maize (ボブ・マイズ)、Billy Childs (ビリー・チャイルズ)、Charlie Parker (チャーリー・パーカー)、ドラム奏者の Dick Berk (ディック・ベルク) といったヘビー級のジャズ才能人が並ぶ。また、ファガンは現代のポスト・ポップ・ビブラホン奏者・Charlie Shoemake (チャーリー・シューメイク) と共に学び、前衛的クラリネット奏者 John Carter (ジョン・カーター) の存在に注視し、後のファガン自身の音楽の全領域でのジャズ探求の姿勢を形成した。1986年、ファガンは NEA Jazz Grant を受けニューヨーク市に移住、サクソフォンの巨匠 David Murray (デイヴィッド・マーレイ) と共に学びながら、時折 Village Vanguard (ヴィレッジ・ヴァンガード) で Murray's Quartet (マーレイズ・カルテット) に参加し、John Hicks (ジョン・ヒックス)、Ray Drummond (レイ・ドラモンド)、Ed Blackwell (エド・ブラックウェル) と演奏した。続く9年間のニューヨーク生活で、Jack McDuff (ジャック・マクダフ) や Dave Douglas (デーブ・ダグラス)、Buddy Rich (バディ・リッチ) ら同窓メンバー、Mel Lewis (メル・ルイス) や Woody Herman (ウディ・ハーマン) のビッグバンドなど、多種多様な演奏家たちと共演。1991年、自身初の CD・*Lost Bohemia* をブラッドフォード、Reggie Workman (レジー・ワークマン)、Andrew Cyrill (アンドリュー・シリアル) らと録音。その後アムステルダムに移住、スウィールニック音楽学校でジャズ・サクソフォンを教えながら、欧州ツアーを数度行った。

再びニューヨークに戻って3年過ごした後、1995年にシアトルに移る。自身の所有するジャズ・カルテットを率いながら、Brian Nova (ブライアン・ノヴァ)、Jay Thomas (ジェイ・トマス) 及び伝説のロッカー・Steve Miller (スティーヴ・ミラー) と共に楽団員としても出演。ニューヨークのテノール奏者 Tim Armacost (ティム・アルマコスト) と共に別の楽団も指導し、自身の名で *Signs of Life* を、Origin Records (レコード会社オリジン) からジャズ共同体 Big Neighborhood (ビッグ・ネイバーフッド) として *Neighbors* と *11:11* をリリース。何年にもわたる自由なコラボレーションを経験後、**The Young Lizards** との **“OUR MODERN LIFESTYLE”** がフェイガン初の Pony Boy Records (レコード会社ポニーボーイ) とのオフィシャルリリースとなる。

“硬く、実直で、純粹・・・そのレパートリーと奏者たちが小さなひねりとサプライズを絶え間なく生み出し続け、はじめから終わりまで飽きる暇を許さない。” – Bill Bennet, *Jazz Times*

“フェイガンの演奏には鋭さがある – 時には音を吐き出しているかのような – けれど同時によどみなく流れ、ミックスしているときですらスイングするのだ・・・” – [Kevin Whitehead, NPR, Pulse!](#)



ギタリスト Dave Peterson(デーブ・ピーターソン) は音楽界における典型的な縁の下の力持ち的秀才である。その謙虚な魂の共演歴にはしかし、度肝を抜くようなレジェンド・オブ・ジャズの演奏家たちが連なる： Dave Liebman(デーブ・リーブマン)、 Dave Friesen(デーブ・フリーゼン)、 Benny Wallace(ベニー・ウォレス)、 Gary Peacock(ゲイリー・ピーコック)、 Chet Baker(チェット・ベイカー)、 Bud Shank(バド・シェインク)、 Eddie Harris(エディー・ハリス)、 Buddy DeFranco(バディ・ド・フランコ)、 Big Joe Turner(ビッグ・ジョー・ターナー)、 Eddie Vinson(エディ・ヴィンソン)、 Julian Priester (ジュリアン・プリースター)、 Dave Holland(デーブ・ホーランド)、 Gil Evans(ギル・エヴァンス)、 Carla Bley(カーラ・ブレイ)、 Anthony Braxton(アンソニー・ブラクストン)、 Bob Brookmeyer(ボブ・ブラックマイヤー)、 Sam Rivers(サム・リヴァース)、 また近年では Rich Little(リッチ・リトル)、 Don Rickles(ドン・リックルズ) 及び Pony Boy All-Star Big Band(ポニー・ボーイ・オールスター・ビッグバンド)が挙げられる。シアトルのコーニッシュ・スクールの学科教員として教鞭もとる。彼のソロ・リリース *After Image*に加え、ピーターソンはシアトルのジャズ支持者 Chuck Deardorf(チャック・デアドルフ)、 Richard Cole(リチャード・コール)らと数多くのコラボ録音に参加、1980年代のクラシック・スパンデックス・ジャズ団 Blue Skies(ブルー・スカイズ)の息を吹き返している。

“デイブは僕のお気に入りだね・・・彼は気取らない雰囲気ですっとやってきて、協力的な態度で周りに聴き入りながら吸収する。それでいて隙間を見つけると舞台の前列に出てきて、リアリティの端っこに指をかけて、ミュージカルな会話の下地に穴をあけてしまうんだ。” – [Greg Williamson, PBR](#)



ハモンドB3を操る Ty Bailie(タイ・ベイリイ) は音楽界をまたにかける数々の著名演奏家達との共演歴を持つ： Pearl Jam's UFO(パール・ジャム・UFO)トリビュート・バンド Flight to Mars(フライト・トゥー・マーズ)の Mike McCready(マイク・マッククリディ)、 「The Presidents of the United States of America」のメンバー、 The Band(ザ・バンド)の Robbie Robertson(ロビー・ロバートソン)、 Booker T and the MGs(ブッカー・T&ザ・MG's)の Steve Cropper(スティーヴ・クロッパー)、 Peter Frampton (ピーター・フランプトン)。伝説的グランジバンド Truly(トゥルーリー)、 Wanda Jackson(ワンダ・ジャクソン)、ブルースの神童 Davy Knowles(デイヴィ・ノウェルス)と Backdoor Slam(バックドア・スラム)。数名はココに記載することさえ出来ない。ベイリイの音楽領域が広範囲にわたり、好ましい振動の密接した流れの中にあることは疑いようもないようだ。

ワシントン州南東部の牧農出身。8歳の時、両親が近所の小麦農家から古いアップライトのピアノを買った。少年ベイリイはその帰り道、ほこりっぽい砂利道を走るトラックの荷台ですっとピアノを弾

き続けていた。16才、転機が訪れる。LAのジャズピアニスト Steve Haberman(スティーヴ・ハバーマン)が近隣の街に移り、ベイリィを音楽界における自身の庇護下においた。2000年、シアトルに移住し、コーニッシュ・スクール等、ハードな演奏を学科におく学校で学ぶ。農家のトラクターから Hammond・オルガンへと職を変え、大から小まで様々なツアーを行う。

“多彩で柔軟、ジャズ調かつファンキー、真実のロック・・・奏でられない音などない・・・彼の魔法は音楽オタクの夢を形作るものすべてを網羅している。” - [The Stranger](#)



ドラム奏者 **Greg Williamson(グレッグ・ウィリアムソン)** はWoody Herman(ウディ・ハーマン)、Glenn Miller(グレン・ミラー)、Harry James(ハリー・ジェイムズ)らと共に軽快なビッグ・バンドのメンバーとしてツアーを行った後、数々の活躍を経、現在ではシアトル音楽界に置いて欠かすことの出来ない存在となっている。出演CDは30枚以上にも及び、その中に歌手Dee Daniels(ディー・ダニエルズ)の近年の作品 *Jazz'n It* が含まれ、同CDはカナダにおいて全国チャート1位の座を取得した。Steve Allen(スティーヴ・アレン)や、Tonight Show Liveで伝説的ピアニスト Paul Smith(ポール・スミス)と数年周遊。広く名高い歌手Ernestine Anderson(アーネスティン・アンダーソン)とは1991年より共演の仲であり、後には彼女の音楽監督としても務めるようになる。自身所有のグループはGW4(ジー・ダブリュー・フォー)からPony Boy

All-Star Big Band(ポニー・ボーイ・オールスター・ビッグバンド)に及び、Don Rickles(ドン・リックルズ)、Bob Newhart(ボブ・ニューハート)、その他数多くの演奏家の舞台上でオーケストラを指導。近年のコラボレーションにはオルガン・カルテットのThe Young Lizardsが含まれ、オルターナティブクラブの場面にジャズの音色を送り込んだ。また大規模なマルチメディアのプロジェクトにも焦点を当てており、受賞歴のある *Conversations & Deconstructions*、*1909 AYP - Jazz Music For Seattle's World's Fair*などで活動。

ウィリアムソンの音楽経験は学校での音楽プログラムやジャズキャンプから始まり、ここで彼はドラム奏者Jeff Hamilton(ジェフ・ハミルトン)やMel Lewis(メル・ルイス)、作家Bill Holman(ビル・ホールマン)とBob Brookmeyer(ボブ・ブルックメイヤー)の指導と、Buddy Catlett(バディ・カトレット)、Ray Brown(レイ・ブラウン)、Red Kelly(レッド・ケリー)、Bill Ramsay(ビル・ラムセイ)、Jay Thomas(ジェイ・トマス)らといった伝説的ジャズ・プレイヤーとの共演を経て芽吹いていく。1994年、Pony Boy Records(レコード会社ポニーボーイ)を設立。同社は50以上に及ぶ作品をリリースし、毎年恒例イベント *Pony Boy Records Jazz Picnic* を主催。毎週 *Jazz & Sushi* のライブも行う。また、毎晩ライブ・ミュージックを開催するワシントン州ノースベンドの *Boxley's Jazz Club* とはパートナーである。

“贅沢なリズム感と、拍子の上から叩きつけるような美しい旋律・・・みずみずしく豊かな音楽の光沢。” - [The Rocket](#)

“彼の情熱は感染性だ・・・ちょっとやそつのもんじゃない。” - [Earshot Jazz](#)

OUR MODERN LIFESTYLE



THE YOUNG LIZARDS

STEREO

CHRIS FAGAN / TY BAILIE / DAVE PETERSON / GREG WILLIAMSON

PONY Boy
RECORDS